

シベリウス交響曲第5番

について自分なりの楽曲分析をしてみた

全体を通して

- 作曲（最終稿）1919年
わずか100年前。比較的新しい曲。
- 1915年に初稿が演奏されたが後に大幅な改訂を実施
 - 4 楽章形式から 3 楽章形式に変更
（旧 1 & 2 楽章→新 1 楽章に統合）
 - 全体的により洗練された楽曲に進化
 - 不協和音は一部削減され、馴染みやすくかつ感動的な形に

1 楽章

- 変形ソナタ形式（と思われる）

大まかな構成は以下のとおり。

再現部では音楽が加速し、春が来たことを感じさせる

（北欧なので、一日中暗い「極夜」が明けたイメージか）

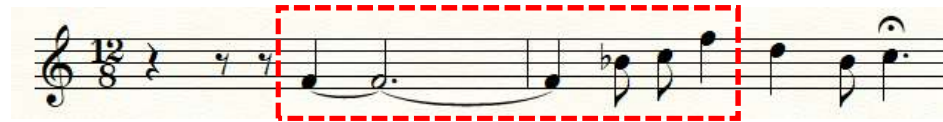
	提示部		展開部				再現部		コーダ
小節番号	1-19	20-35	36-51	52-70	71-91	92-105	106-217	218-496	497-
使用される主題	第1主題	第2主題	第1主題	第2主題	第1主題？	第2主題	第1主題	第2主題	第1主題
主な調性	Es	[不明]G？	G→B→F	[不明]Es？	[不明]	[不明]	H→Es	Es→H→[不明]	Es
備考			提示部繰り返しとも取れる	提示部繰り返しとも取れる	・弦の掛合い ・Fgソロ 第1主題の変形？		拍子感の変更と同時に主題も変形され、雰囲気が変わる。 114小節目から、初版での第2楽章の内容となる。	大幅に形が違うが、第2主題の要素となっている	金管のファンファーレは、第1主題の変形

1 楽章

- 第1主題

「ソドレン」 (Cdurの場合) の音型が重要な主題

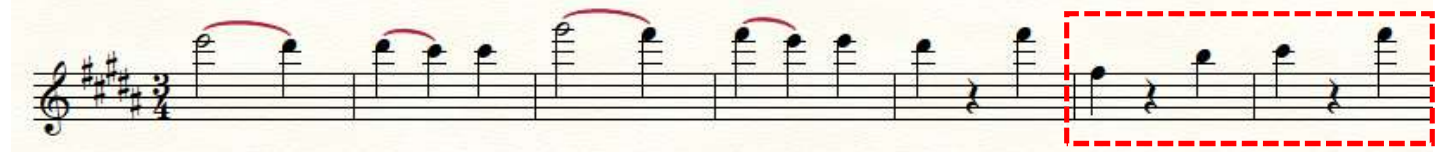
提示部 Hr(1-)



再現部 Tp(106-)



再現部 Fl(114-)



コーダ Tp(505-)



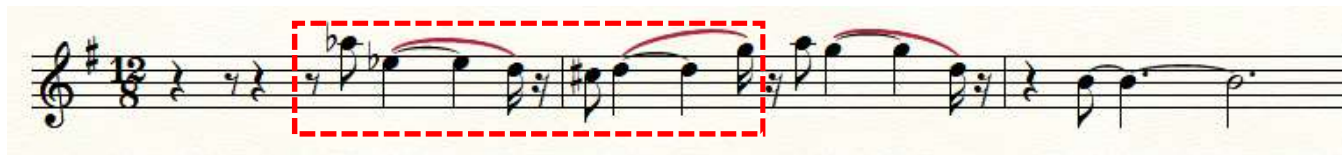
※括弧内は抜粋部分の小節番号

1 楽章

- 第2主題

提示部では悲しみのメロディー、再現部は少し異なった雰囲気。
下記の枠線部など共通部もあり、同一の主題と解釈できる。

提示部 Fl(20-)



再現部 Tp(106-)



※括弧内は抜粋部分の小節番号

3 楽章

- 変形ソナタ形式（と思われる）

特筆すべきはやはり第3主題。単純な音の上下であるが、16羽の白鳥が湖の上を旋回している姿が想像させられる。

	提示部		展開部	再現部		コーダ
小節番号	1-104	105-212	213-279	280-359	360-434	435-
使用される主題	第1主題	第2主題 第3主題	第1主題	第1主題	第2主題 第3主題	第3主題
主な調性	Es	Cm→C		Ges	Es m→ Es	Es
備考		低弦の第3主題の動きがホルンへと続き、第2主題提示部へとなだれ込む。その上で木管が第2主題を朗々と歌う。			第1主題の弦楽器の刻みがいつの間にか第3主題になっていく。407小節目からは、木管が第3主題を引き継ぎ、弦楽器が第2主題を歌う。	第3主題はトランペットと木管が引き継ぐ。第3主題は少しずつ上昇クライマックスへ向かう。 シベリウスは交響曲第5番を作曲中に、16羽の白鳥が湖の上をゆっくり旋回している光景に靈感を受けたと言われている。特に、457小節目から1拍ずつずれて演奏されるメロディーは、白鳥が連なって線状にすこしずつズレながら飛んでいく様を連想させる。

3 楽章

- 第2主題

第3主題の上で歌われる素朴な北欧らしさを感じるメロディー
大きな3拍子で、再現部の最後には記譜も3/2拍子となる。

提示部 Ob(129-)



再現部 Fl(371-)



再現部 Vn(407-)



※括弧内は抜粋部分の小節番号

3 楽章

- 第3主題

交響曲全体を通して最後に残るメロディー。
飛び立っていく白鳥の鳴き声のようにも聞こえる。

提示部 Hr(105-)



再現部 Vn(371-)



再現部 Ob(407-)



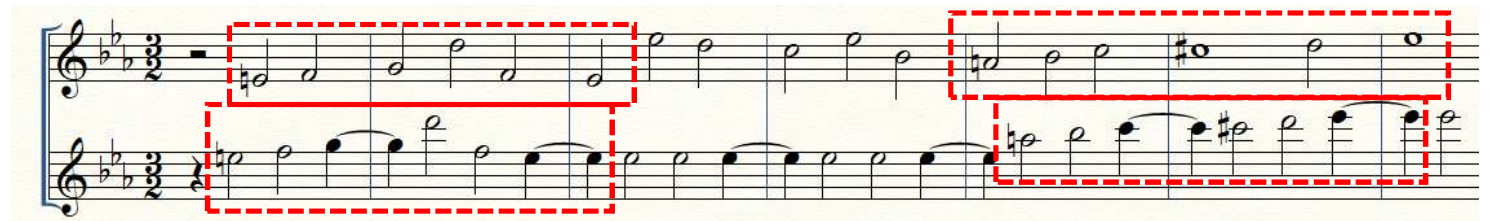
※括弧内は抜粋部分の小節番号

3 楽章

- 第3主題（続き）

ブランコのように揺れるテーマが段々と形を変え、
少しずつ高く上がり、弦楽器と管楽器で半拍ずれて演奏される。
まるで16羽の白鳥が線のように連なって飛び、少しずつ上昇し、
大きく旋回しながら、線が重なったり離れたりして見えるよう。

コーダ Tp/Vn(457-)



※括弧内は抜粋部分の小節番号

最後に

- 全楽章を通して北欧の寒くて澄みきった空気感
- 情熱的な演奏も悪くないが、透明感のある音が個人的には好き
- シベリウスは本曲の改訂作業を「神との格闘」と呼んだ
神から降りてくる美しいメロディーを、地上で1つにまとめた
- 16羽の白鳥が湖の上を旋回しながら飛ぶ様子に、神の存在を感じたシベリウスを思いながら、特にクライマックスは神々しく演奏したい。